

子ども視線

上坂元絵里

ある朝のこと

一月中旬のある日、三番目にO子が登園してくる。祖父が送って来る。朝は部屋に来る前に、必ずトイレによって来て欲しいと伝えてあるので、祖父は「トイレはないと言いますので、寄ってお

りません」と、申し訳なさそうに言う。O子はまだあいさつをしていない。O子はいつも、登園が早いほうだ。この日もまだ保育室は静かで、私はゆったりとO子と出会えた。

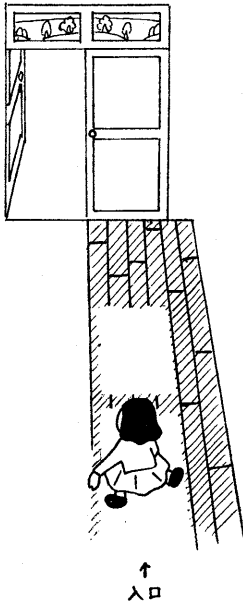
入口からまっすぐに視線を向けたO子は、やや上を見ながら数歩前に進む。朝日が射し込んで、

庭への出入り扉にはめこまれたガラスを通して、床に日だまりを作っている。O子は、その明るい場所の真ん中に行くと、すんと腰を落としてぺたっと座り込んだ。言葉はひとつもない。このわずかな時間の出来事は、印象的な映像として私の中に残っている。何か、映画のひとつまでも表現したいような、美しさがあった。

私共の園は、古いレンガ作りの園舎で、保育室は木の床のぬくもりが感じられる。上窓には、組

の名前にちなんだステンドグラスがはめこまれていて、思いがけず美しい光を見いだすこともある。四季折々、あるいは一日の中でも時間によって、いろいろな風情が感じられる。

O子が座った時に初めて、光を見上げていたのだということがわかった。私の勝手な推測かもしれないが、この時、O子はガラスを通して、木の床に射し込んだ光をきれいだなと思い、その暖かさを体で感じたくて座り込んだのだろうと思っ



た。そして、私は、目で美しさを感じ、体で暖かさを感じている。O子そのものが、とても美しい、愛らしいと感じた。私の中には何ともいえない感動があった。

次々に登園してきた母親たちが、「あの活発なO子ちゃんが珍しいですね。イメージが違っちゃいました」と驚く。私は「O子ちゃんは、とてもよく物を見ていて、こういう雰囲気をもってるお子さんなんですよ」と話した。

O子のこと

O子は三年保育の三歳児、早生れだが、話すときに少し幼児音が残る以外は、すこぶるたくましい。この組には、いろいろな事に興味を持ち、いろいろな人と積極的にかかわろうとする活発な子どもが多かった。O子はその中でも、欲しい遊具はしっかりと自分の物にする、目新しいことには

しっかりと参加する、というタイプだった。

例えば、三学期に入って、ごっこ遊び用の長いスカートを新しく保育室に出した。その際にも最初の二日間は、一番目を引く赤いスカートはO子が使っていた。O子のアンテナの鋭さと行動の早さに、今更ながら驚かされた。そんな訳で、いつもO子が使ってしまうとか、O子が先にやってしまったとか、他の子が訴えかけて来るようなことはしばしばあった。けれども不思議と、それでO子が友だちから排除されるということはありません。むしろ、O子ちゃんと遊びたいと言う子が多かった。それは、O子と一緒にいるとおもしろいからではないかと思う。いろいろな事によく気がつき、イメージが豊かで、しかも、やりたいと思ったことには自分のペースでとことん取り組む。一見、相反するような両面の魅力を持っているのである。

〇子ちゃんておもしろいわね

誕生会

前述の出来事から数日後に、年長組の担任のM先生が、「今日、おもしろいことがあったのよ」と話してくれる。

年長の保育室の、大人の背丈よりも高いところに、てぐす（半透明の釣り糸）が張ってあるところで、年長の子どもでも、あまり気がついていない人はいないという。ふと、廊下を通りかかった〇子が、何だか不思議そうに、じっと、その線を見上げ、何度かその場で「よいしょ」と言いながらジャンプして行ってしまったというのである。M先生も、他の子どもと視線が違うように思ったと言われた。

ちょうど、あの朝のことがあった直後でもあり、やはり、〇子の物を見る視線はユニークなのだなど改めて感じる。

三月の誕生会で、保育者が「ヘンゼルとグレーテル」の音楽劇を見せる。森の中に迷い込んだ二人が、夜になると寝込んでしまい、次の朝目を醒ますと……という場面で天井の電気を消し、幕の内側の上部に取り付けてある色電球を使った。

元の照明に戻ったところで、一番前列に座っていた〇子が、ふらふらと立って舞台のほうへ出てきてしまう。「ああ、また落ちて見られないのかしら？」と、出演していた私は幕の袖で内心ひやひやする。すると、〇子は幕の内側をのぞき込んで見上げている。少し怒りかけていた私は、「ああ、照明のしくみを知りたかったんだわ」と思い、ちょっと〇子に申し訳無かったと反省する。と同時に、〇子の関心の持ち方と、それをすぐに確かめようとする智慧に感心する。

花みつけ

三月に入り、大変だった三歳児の組の生活にも、穏やかさが感じられる頃となる。

四人の女兒に呼ばれて、ブランコを押しに行く。「私はすべり台」「私はジェットコースター」……とそれぞれのイメージで、私に押すことを要求する。ふと見ると、少し離れたところに梅の花がきれいに咲いている。私が「きれいに咲いているわね」と言うと、N子が「知ってるわよね、おひなさまに飾る花よね」という。おしゃまなN子の勘違いに、ひとりでにやっとしてしていると、N子は「あっちにも、もつときれいなのが咲いてるわよ」と言っ指さす。梅の木の方向に目をやると、その先に、例年より早めに咲いたこぶしの木が目に入る。こぶしは、すぐ隣にそびえるヒマラヤ杉のせいで、ずっと上の方にだけきれいに花を

つけている。私からみてもあんなに高いところなのにと、N子の言葉に驚く。

子どもの視線

私達はよく、子どもの目の高さでという言葉を使う。また、実際に腰を落として背を低くして、保育室を見直して見たりもする。そうすると、さっきまで見えていたものが見えなくなったり、さっきとは違うものがやたらと目に入ってきたりもする。子どもの目の高さの「低さ」に注目することが多い。

いくつかの場面から、O子は他の子に較べて物を見る、とらえる、視点・視線がともユニークなように感じていた。高いところにある物によく気がつく。それは、視野が広いということ、O子が身の回りにある刺激を取り入れる力が豊かなのだと。そして、それがO子がよく遊べるという

ことに結びついていっているのではと思った。

だが一方で、今、はたと気がついたのは、子どもは見上げることに慣れているのだなという点とである。子どもと話しているとき、あごを突き出して上を向いて話す子どもに気づいて、あわてて腰を落したりすることもある。大人のサイズで動いている社会の中で、おもしろいな、何だろう、どうしてだろう、と思うと、子ども達は必死で首を伸ばして上を見上げることになるのだろう。子どもの視線でといっても、奥が深いと今さら感じる。背丈の小さい子どもに合わせて、様々な工夫しながらも、こちらの予想を越えていろいろなことを感度よくキャッチする子ども達のアンテナに学びたいと思う。

空の美しさ

東京の空も、冬の間は思いがけずきれいな

る。O子の様子に感心していたせいか、私自身もこのところ、空を見上げてきれいだなと思うことが多かった。

私の場合、上を向くのは精神状態が比較的良い時かとも思う。冬でなくともいつも、空や雲に目を向けられるような心持ちで、保育の場にいられるようにと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

